

益田市市長  
山本浩章

昨今の新型コロナウイルス感染症の流行により、あらためてウイルスが人類の脅威として浮かび上がっています。しかし、46億年に及ぶ地球の歴史のなかで、ウイルスは40億年前から存在しており、ただか20万年前に出現したばかりのホモサピエンス（ヒト）は新参者といえます。

細菌よりもさらに小さいウイルスは、単独で増殖することができず、他の生物の細胞に入り込み、次々と自分のコピーを作って増えていきます。地球上に約3万種あり、鳥類と哺乳類に感染するものが650種ほどとされます。

周囲に王冠を想起させる独特の突起を持つコロナウイルスですが、近年までヒトに感染する型は4種類しか流行したことがなく、感染の際の症状も通常軽い風邪程度でした。ところが、21世紀に入り主にアジアで流行したSARSとMERSは新種

のコロナウイルスが原因となった新興感染症であり、重篤な肺炎により死に至ることもあります。

7種類目のヒトコロナウイルスとなったこの度の「新型コロナウイルス」は、感染しても無症状または軽症で済む場合が多い一方、高齢者や基礎疾患をお持ちの方には命にかかわる重症となるおそれがあります。収束のためには、ワクチンまたは治療薬が開発されるか、あるいは多くの人が免疫を持つようになつて集団免疫ができる必要があるとも言われており、不安は尽きません。

暗い影は経済・社会にも差しています。特に、人が動き、集うことが前提となる事業活動や日々の営みは、終わりの見えない「自粛」によって停滞を余儀なくされています。コロナ禍がさらに長期化すれば、より広い範囲に影響が及ぶことは避けられません。

もう一つ見過ごせないのは、感染者やその家族に対する心ない誹謗中傷や真偽不明の情報が飛び交うことです。病気にかかりたくてかかるとはいません。本当にいたわるべき対象は誰なのか、良識に基づいた思いやりのある言動が今もっとも求められます。ウイルスに身体だけでなく心までむしばまれることは避けなくてはなりません。

## 日本遺産のまち益田の歩き方

### 第2回 中須東原遺跡と福王寺

【問い合わせ先】市文化財課 ☎ 31-0623

中世の益田平野は、高津川・益田川と砂州に囲まれて潟湖（せきこ）のようになり、天然の良港といえる地形で

した。中須東原遺跡（国史跡）は、河口域に成立した港町の遺跡です。12世紀に成立し、13世紀に発展、15世紀に最盛期を迎え、16世紀に衰退したと考えられています。中世の港町の構造や日本海交易の実態の解明が期待されるとして、全国の中世の港町の代表的な遺跡と評価されています。

遺跡の南側が、中世の河道の跡です。遺跡の北側には砂丘があり、これが潟湖形成の要因となった砂州のひとつです。港町が砂州と河道の間に形成されたことがよくわかります。砂丘には2カ所、南北方向に道が通っており、南に向かうと中須東原遺跡を縦断し、北に向かうと厳島神社に至ります。これらの道は中世にさかのぼると考えられています。

また、出土遺物から、港町は当初、福王寺のあたりから形成され、次第に広がっていったと考えられています。

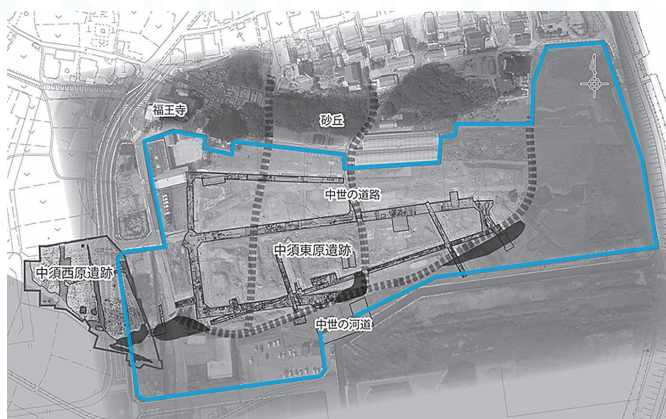
その福王寺は、浄土宗の寺院です。他地域の事例で、高度な専門知識を持つ僧侶が交易の事務を担っていたことから、中世の福王寺（あるいはその前身寺院）も同様の役割を担っていた可能性があります。

福王寺の見所はその豊富な石造物

です。石造十三重塔（島根県指定有形文化財）は、西大寺系律宗がその交易網を展開する際に、拠点となる末寺に建立したものと類似します。

花崗岩製の五輪塔は兵庫の御影石製の可能性があり、瀬戸内地域との交易を示唆します。また、宝篋印塔には、福井県の日引石製のもの、石見銀山の近くで採れる福光石製のものがあり、それぞれ日本海交易により運び込まれたと考えられます。石造物からも交易の様子を知ることができます。

**場** 中須東原遺跡…中須町  
福王寺…中須町182番地  
石見交通バス大塚線（大塚行）  
福王寺口バス停すぐ



中須東原遺跡と福王寺